

ねじりはちまき

3月 弥生 啓蟄 春分の月になりました。
3月1日、春の全国火災予防運動（3月1日から7日迄）。3日、雛祭り
です。5日は啓蟄で、8日は旧暦の初午です。
20日、春分の日。春の彼岸の中日でお墓参りですね。
30日、旧暦の3月節句です。

古くから日本人は、季節の変わり目を節日と呼んで大切にきて来ました。
江戸時代に定めた、5節供（句）もそのひとつです。

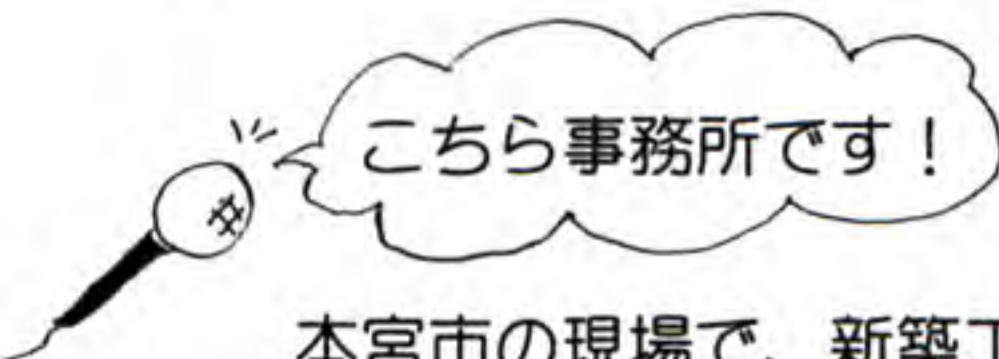
「人日じんじつ」正月の7日、七草の節句。「上巳じょうし」3月3日、桃の節句。
「端午たんご」5月5日、菖蒲の節句。「七夕しちせき」7月7日、たなばた祭り
です。「重陽ちょうよう」9月9日、菊の節句と合わせて5節句と呼ばれました。

中世より江戸時代にかけて民間に伝わるようになると、上巳が雛祭りと一緒
になって、一層にぎやかになりましたが、桃の花の節句といってもこれは陰暦
ですから、陽暦の3月3日には桃の花は間に合いません。

時々ぶり返し、寒波がやって来ます。
そんな日を、冬3月と呼ぶのだそうですね。寒さも少しづつやわらいで来まし
た。もう少しで、春はやって来ます。
がんばります。

幸田 常一

* * * * *



本宮市の現場で、新築工事を2件お世話になっております。
1件は、住宅と店舗。もう1件は住宅です。
完成までは、まだまだもう少しかかりますが、気持ちを引き締めて
頑張っています。

「フユトレ 2」

私がお世話になっておりますk市にある山岳愛好会では、夏山山行に備えて冬季のトレーニング(以下「フユトレ」と書きます。)を実施しておりますが、今年も例年通り2月に2回、3月初旬に1回実施の予定になっております。

このフユトレについては、ねじりはちまき202号に投稿した通りですが、誤解していたこととか、毎年同じ所を歩いていても、新しい発見があることを、報告いたします。

まず、2月中旬に2回目のフユトレの際は、いつもの様にスノーシュ(西洋カンジキ)組6人と、スキー組3人とに別れて冬トレを実施しました。

私は、スノーシュ組に入り、毘沙門沼から檜原湖畔にある裏磐梯物産館までスノーシュを履き、雪の中を檜原湖に向かって歩きました。

これまでは、毘沙門沼のことを五色沼と思い込んでおりましたが、それは間違いで、最初の沼が毘沙門沼、檜原湖に向かって最初の沼が赤沼、次がみどろ(深泥)沼、竜沼、弁天沼、瑠璃沼、青沼、柳沼と続きますが、この湖沼群を五色沼というのだそうです。

次に新たに発見したのが、毘沙門沼の畔にある日本赤十字社の記念碑です。その記念碑には、頭に60cmほどの雪が積もり、記念碑の半分程が深い雪に埋もれていましたが、碑に刻んである文字を読みますと、「明治21年(1888年)7月15日、磐梯山が噴火した際に、戦争以外で活動した最初の土地だった。」という意味のことが書いてありました。

早速スノーシュ組の全員で、この碑を中心にして記念写真を撮りました。

皆様、裏磐梯に行く機会があったら、是非立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

次に、カラマツ林の中に建てられている、バンガローの屋根に、降り積もった雪が50cm程もあり、バンガローの半分程が雪に埋もれていました。

まるで、会津出身の版画家斎藤清氏の、会津の冬シリーズを見ている感じになりました。

身を切るような冷たい冬なのに、私には何か温かいものが感じられました。

今年の裏磐梯の積雪量は、昨年と比べ2倍近くに(私の感じ)なるのでは。毘沙門沼を出発する際、ガイドの引率でスノーシュを履いた20名程の団を出発して間もなく追い越した後は、ひたすら雪の中を歩く。

物音ひとつしない静寂の世界。

心も身も洗われる感じになりました。

縄文時代と人間

今回は「縄文人の世界観」を取り上げたい。とは言ってもそのようなテーマを取り上げる見識は小生にない。実は「縄文人の世界観」という本がある。著者は大島直行という人で、札幌医科大学客員教授で北海道考古学会会長を務めている。この本は昨年3月に発刊されたものである。小生も「人間にとって進歩とは何ぞや」を考えるうえで、縄文人に関心を寄せていたので新聞広告をみて思わず買ってしまった。そこで今回は、この本の中から現代の我々の生き方にも関連しそうなところをピックアップして紹介したいと思う。

先に青森の「山内丸山遺跡」のことを紹介したことがあったが、定住生活や遠隔地との交流などその意外性に驚かされたものである。この遺跡は縄文時代の後期のものといわれるが、そもそも縄文時代は約1万年の永きに及ぶのだ。縄文時代の次が農耕の始まる弥生時代だが、弥生時代から現代までは約2千三百年足らずなのだ。いかに縄文時代が永かったかが分かる。その永い年月の時代に培われたDNA（遺伝子）は現代の我々に受け継がれているのだから、縄文人と現代の我々の思考はそんなに変わっていないと思うのだが。どうだろうか。そうは言っても、科学の発達等によって違いもあるはずとの思いが過ってくる。共通性と相違点のどちらに焦点を当てるのか。先ず著者の言い分を聞いてみよう。

先ず縄文時代に「宗教（信仰）」があったのか。もちろん仏教もキリスト教も伝来していないし、神社・仏閣など持たなかった。でもシャーマニズムといわれる自然崇拝はあったのか。著者は「生死」の「死」に対する考え方が重要だという。「死」を認めるかどうかである。縄文後との違いはどこにあるか。縄文後は「死を認める」から宗教が必要とされる。つまり「死を認める」が故に「死にたくないという死に対する恐怖心」が起こる。そこで宗教（浄土や天国、或はよみがえりを説く）が求められた。一方縄文人は「死を認めない」から宗教を必要としない。つまり「死」に対する恐怖心はないのだ。ひたすら「再生」を信じていたというのだ。そもそも「再生」を信じるといえるのは信仰ではないのかという話にもなるが、どうもそれが「信じる」ということでもなく、ごく自然体ということなのだ。自然体という言葉を使ったが、自然と密着した生き方においては、四季の変化の中で特に冬を経て春を迎えるサイクルの自然のありようの中に、人間の生死のありようを見ていたのではないかと小生は思う。ところで、「死を認める、認めない」とうのはどういうことなのか。「死を認める」とは「死ねばすべて終わり」という考え方なのだろう。つまり「人間は肉体的存在で、肉体がなくなればすべて終わり」となってしまう。これに対し「死を認めない」とは「人間は肉体的存在ではあるものの、肉体の死を迎えてもそれで終わりではなく、その後再生を繰り返す」と、どうも目には見えない生命の神秘を直観していたのではないか。どちらの考え方が合理的と言えるかと問えば、現代では大方は「死を認める」側であろう。だがここでは、どちらが正しいかの決着を付けようとするのではない。つまり、人間にはなぜなのか説明のしにくい非合理的な面が大いにあるということだ。人間の心の領域には「無意識の世界」があって、それが意外と人間の判断・行動を支配しているというのだ。意識的でないがゆえに、非合理的とみえる。この「無意識の世界」を覗いてみると、どっぷりと自然と繋がっていた縄文時代のDNAが生きていて人をつき動かしても不思議でないと思うがいかがか。例えば、自然界のありようを人間の合理的な考え方で全部説明し尽くせるものか、それは現代でも難しいからだ。意識に昇らない縄文時代のDNAがうごめいて現代でも人間をつき動かしている—そんなことを考えると面白い。自然とかい離している都会の人々が休暇になると、レジャーと称して山や海に出かけて自然に触れる。レジャーと称しているが、実は潜在する無意識では自然に触れることを求めているのかもしれない。小生はそう思ったりするが、どんなものだろうか。

縄文時代の「生死」をめぐる話に戻ろう。では縄文人が「再生」を信じていたことはどんなところに読み取れるのか。その説明として著者は「縄文土器」を取り上げる。縄文土

器がどんな形状をしているかご存知の方が多いと思う。縄文土器は皿や鉢、高杯などがあるが、深鉢には縄目の文様が施され、火炎状のものもある。そこで、著者は通説と異なり、縄文土器の形は煮炊きや灰汁抜きに直結した機能性に由来しているわけではなく、再生を象徴する月の水を集めるという目的を第一に考えだされた呪術・祭祀道具であるとする。つまり、縄文土器は鍋のような生活の実用向けにつくられたものではないというのだ。そのことは、深鉢を見ると美しくて芸術的であるが、決して鍋のように使えるものではないことから伺い知ることができる。また、「月の水を集める目的」の創作イメージは、縄文土器として造られた猪口や急須、徳利が現代にも受け継がれているというのである。

次に縄文人は「再生のシンボル」としてどんなものを考えていたのか、著者は次の四つを挙げる。その一つは「月」である。月は周期的に満ちたり、欠けたり、見えなくなったりする。即ち月は人間の生成、誕生と死を象徴するものである。二つ目は「水」です。これは神話にみられる「月と水の親和性」からも説明できるが、多くの縄文遺跡が川や湧水の近くに立地しているように、雨と降り、流水となり、蒸発してまた雨となる循環の姿に再生を観たことが伺える。三つ目は「女性(子宮)」である。新しい生命が生み出される子宮に再生が象徴される。四つ目は「蛇」である。なぜ蛇がと思うかも知れないが、蛇は脱皮を繰り返すことから“死なない、蘇る”ものの象徴として認知されたというのである。蛇は意外と世界的に不死や再生のシンボルとされているようだ。著者はこの四つが再生シンボルの中核をなすという。皆さんはどう思いますか。小生は一つ目の「月」について、「太陽」でなくなぜ「月」なのかと思ったが、日本人の精神史を振り返ると、陰暦を始め「月の満ち・欠け」にいろいろな想いを寄せてきたことが伺える。それと四つ目の「蛇」であるが、好き嫌いからいうと好きな人は余りいないだろうが、蛇の生態からいうとまさしくそうだし、蛇を祀る宗教も現にあると聞くから認識を改めさせられた次第である。さて、これまで論を進めた著者はさらに「神話的世界観」に話を展開していく。その神話的世界観は「再生の思想」で貫かれているという。縄文人の思想は「死の否定」であり、生存の証は“死なない”ことである。科学的知見をもたない時代であるから、理論武装としてはただひたすら「神話」を研ぎ澄ますことが唯一の道であった。その神話は自然と真向かうことによって一層研ぎ澄まされ、いわば今日の科学性、論理性の枠を超えた神秘性、直観性に支えられたものとして仕上げられる。分かりにくいかもしれないが、その神話は一見非合理的で、恣意的に映るかも知れないということでもある。例えば、「古事記」に登場する神話（若しかしたら縄文時代から伝承されているものがあるかも知れない）は、今日の合理的思考からすると、とんでもない話に思えるが、そこを踏ん張って何をいわんとしているのか心を澄ませば、観えてくるものがあるのかも知れない。でも、そうは言ってもちょっと難しいかな。著者はまだまだ持論を展開するわけだが、この辺で打ち切りたい。この本を読んで小生は教えられるところが多かった。つまり、教えられたのは、歴史を学ぶ際、その時代に生きた人々の思想（気持ち）にどれだけ寄り添って（踏み込んで）考えられるかがとても大事であるということである。そうすることにより、人間はそう変わってはいないものだということが分かるのかも知れない。と思うがどうだろうか。

このようにして、裏磐梯のフコトレは終わりましたが、スキー組の3人のお迎えを受け、裏磐梯スキー場のレストハウスで温かい昼食をとり、帰り道に蓮華沼畔で開催中の雪まつりを見学。さらに中ノ沢温泉「ぼなりの湯」で、今日の疲れを洗い流して、ぼなり峠経由で全員元気に帰宅することが出来ました。

3月上旬のフコトレは小国山で実施の予定。このフコトレにも是非とも参加させて頂き、夏山山行に備えたいと思っております。

k・s記



出いっ 「啓蟄」

3月5日。

地中にいて、冬ごもりをしていた虫も、ぼつぼつ穴から這い出してくることをいいます。本格的な春の訪れまで、あともう少しですね。

.....

今月の旬♥食材

「菜の花」

菜の花には、カロテンやビタミンC、カルシウムや鉄分も多く含まれています。ほろ苦かったりしますが、それがまたおいしいですね。

お吸い物の実にしたり、たくさんあるときはからしじょうゆやゴマ和えなどの和え物にしたり、さつとゆでてお浸しにしてもおいしいです。

きれいな緑色なので、いろいろなお料理に彩りを添えてくれますね。

つぼみいっぱい、元気な菜の花を選んで下さい。

.....

3月の花

れんぎょう

れんぎょうの黄色い花の色がとてもきれいです。

薬としての歴史が長く、腫れや解毒などに用いられてきたそうです。

鮮やかな黄色の花を見ていると、元気がでそうですね。

<会社近況>

3月になりました。
春の到来を思わせるような暖かい日もあれば、ぐんと気温が下がって寒かったりしますね。三寒四温をくり返しながら春めいて来ます。
体調を崩さないよう、どうかお体大切になさって下さい。

今月は、企画住宅の広告(オリジン・冬バージョン)を同封させていただきましたので、お時間があるときにでもご覧になって下さい。よろしくお願いします。

★お知らせ★

3/20(月) 「春分の日」
お休みさせていただきます。



3/1日、弊社に新入社員が入社いたしました。

武田 和也 (たけだ かずや) 29歳。

大玉村出身で、現在は本宮市に住んでいます。

大玉村で育った武田君は、子どもの頃、大玉村の友達の家遊びに行っていたそうで、その友達の家というのが弊社で建設させていただいたお宅でした。もしかしたら社長や職人達は、その頃すでに武田君に出会っていたのかも知れませんね。そう考えると、人と人のご縁というものは何とも不思議なものだなあと感じます。大工として頑張ってまいります。

ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

平成29年 3月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話0243-44-3816

<後記>

先日ふきのとうをいただきました。
吹く風は冷たいですが、もう春が来たのだなあとと思うとわくわくしてきます。

(事務員k)